

唐玄宗「御製御書」闕特勤碑文考

— 唐・突厥・吐蕃をめぐる外交関係の推移 —

はじめに

復興突厥（または突厥第二可汗国）の第三代可汗、毗伽（開元四年〔七一六〕～二十二年〔七三四〕在位）が書いた闕特勤碑文は、北方遊牧民族としてはじめて独自の文字を持った突厥人が建てた碑文として著名で、最古のトルコ文学として、また北アジア・中央アジアの民族・風習を解明する上での第一次史料として、トムセンの解説以来今日に至るまで、歴史学、民族学、言語学等の様々な角度から考察・検討を加えられてきた。

この毗伽の碑文と同じ碑石には、唐の玄宗が自ら撰文書写した碑文が刻されているが、この「玄宗の碑文」は毗伽の突厥銘文ほど有名ではない。玄宗の碑文は闕特勤碑文の漢文面と呼ばれ、突厥文字を解読するための手がかりをさぐるために発見当初取り上げられたこともあったが、突厥文字解読後は研究対象が突厥文にのみ集中したせいもあって、研究されることは極めて稀であった^①。闕特勤碑文の建碑に際して玄宗自らが筆をふるったことは『旧唐書』卷一九四・突厥伝に見え、

菅 沼 愛 語

開元二十年、闕特勤死す。金吾將軍張去逸、都官郎中呂向に詔して璽書を齎し蕃に入りて弔察せしむ。并せて為に碑を立てる。

上、自ら碑文を為る。なお、祠廟を立て、石を刻みて像を為り、四壁にその戦陣の状を画く。

とある。従って、玄宗の碑文は唐側の外交姿勢を反映した外交文書に対応する第一次史料としても活用できると考えられる。

本稿は、まず第一章で玄宗の碑文の全文を紹介し本論と関連する部分に注釈を加え、第二章で碑文に見られる唐の外交姿勢を考察し、最後に第三章で碑文を通して見える当時の東アジア、中央アジアの情勢を、唐、突厥、吐蕃三国の外交関係の推移を基軸に考察してみたい。

一 闕特勤碑文の注釈

本章では玄宗の碑文に何が記されているかを判読し注釈を加えたいと思うが、紙幅の都合上、注釈は以下の論考に関わる箇所のみを取りあげる。なお、玄宗の碑文は京都大学文学部東洋史研究室所蔵の闕特勤碑文漢文面の拓本より移録した。

彼蒼者天网不覆燾天人相合寰寓大同以其氣隔陰陽是用別為君長彼君長

史 窓

者本□□□／裔也首自中国雄飛北荒來朝甘泉願保光祿則恩好之深舊矣
 泊 我高祖之肇興皇業／太宗之遂荒帝載文教施於八方武功成於七德
 彼或變故相革榮號迭稱終能代□□□／修邊貢爰逮朕躬結為父子使寇
 虐不作弓矢載擻爾無我虞我無爾詐邊鄙之不□□君之／賴歟君諱闕特勤
 骨咄祿可汗之次子今苾伽可汗之令弟也孝友聞於遠方威□□儻□□俗／斯
 豈由曾祖伊地米施匄積厚德於上而身克終之祖骨咄祿頡斤行深仁於下而
 子□□□／不然何以生此賢也故能承順友愛輔成規略北燮眩雷之境西隣
 處月之郊尊揆黎之□□／受屠者之寵任以親我有唐也我是用嘉爾誠績大
 開恩信而遙圖不騫促景俄盡永言悼惜／疚于朕心且特勤可汗之弟也可汗
 猶朕之子也父子之義既在敦崇兄弟之親得無連類俱／為子愛再感深情是
 用故製作豐碑發揮遐壤使千古之下休光日新詞曰 沙塞
 之國丁零之鄉雄武鬱起于爾先王爾君克長載赫殊方爾道克順謀親我唐孰
 謂若人／罔保延長高碑山立垂裕無疆

【訓読】

彼の蒼なるものは天、覆燾せざるはなし。天人あい合し寰寓大同なり。その氣を以て陰陽を隔て、ここを以て別れて君長と為る。彼の君長はもと〔夏后氏〕^②の裔なり。首に中国より北荒に雄飛し甘泉に來朝す。光祿を保たんことを願う。則ち恩好の深は舊し。我が高祖の皇業を肇興し、太宗の遂に帝載を荒めるに泊び、文教は八方に施され武功は七德を成す。彼或いは變故あい革め、榮號、迭いに稱し、終によく代わりて□□□□、邊貢を修め、ここに朕が躬に逮んで結びて父子と為る。寇虐をしてなさしめず、弓矢をして擻に載めせしむ。爾は我を虞れるなかれ、我は爾を詐るなし。邊鄙の□□せざるは君にこれ頼るか。君、諱は闕特勤、骨咄祿可汗の次子にして今の苾伽可汗の令弟な

り。孝友なるは遠方に聞こえ、威□□は□□俗に儻れらる。これ、あに曾祖の伊地米施匄が厚德の上に積みて身は克くこれを終え、祖の骨咄祿頡斤が深仁を下に行いて子が□□するによらんや。然らずんば何を以てこの賢を生むや。故によく友愛に承順し規略を輔成す。北は眩雷の境を燮め、西は處月の郊に隣す。揆黎の□□を尊び、屠者の寵任を受け、以て我が有唐に親しむなり。我ここをもつて爾の誠績を嘉す。大いに恩信を開きて遙かに騫わざることを圖る。促景にわかには盡き、永言して悼惜し、朕の心を疚ます。かつ特勤は可汗の弟なり。可汗なお朕の子のごときものなり。父子の義すでに敦崇にあり、兄弟の信、連類なきを得んか。ともに子愛たり。再び深情に感ず。ここをもつて故に豐碑を製作し遐壤に發揮す。千古の下をして、休光、日に新たならしめん。詞に曰く。沙塞の國、丁零の郷。雄武、鬱んに爾の先王より起こる。爾の君、克く長たり。載ち殊方に赫かす。爾の道、克く順たり。謀りて我が唐に親しむ。孰か謂う。人の若きは延長を保するなし、と。高碑は山立し、裕を垂れること疆なし。

【注釈】

(a) 二行目…來朝甘泉願保光祿故恩好之深舊

『漢書』卷九四・匈奴伝には、

呼韓邪单于、正月、甘泉宮において天子に朝す。漢、寵は殊礼を以て位は諸侯王の上に在る。(中略)单于自ら請うらくは、光祿塞の下に留居せんことを願う。

とある。同様の記事は『漢書』卷八の宣帝紀に見え、これが甘露三年正月の出来事とわかる。玄宗は、この故事から引用したわけである。

兄の郵支单于と单于位を争って破れた呼韓邪は、この年、庇護を求

唐玄宗「御製御書」闕特勤碑文考

めて来朝し、甘泉宮で宣帝に拜謁した。高祖以来、匈奴とは長らく敵対関係にあった漢にとって単于自らの投降は前代未聞の事件であった。宣帝は臣従を誓う呼韓邪に支援を約束し、かくして漢の後援を得た呼韓邪は、兄を追い払い単独の匈奴単于として返り咲く。呼韓邪およびその後継者たちは、以後、漢への朝貢を欠かさず行ったし、漢も公主を与えるなどして匈奴への懐柔策を繰り返した。こうして漢と匈奴の間に和平の時期が続く。^⑤

呼韓邪の名は、後漢以降も中華と匈奴を結びつけたシンボルとして捉えられていたようである。^⑥玄宗も、開元六年、はじめて和を請うてきた毗伽に与えた璽書の中で「漢に呼韓邪あり。これ卿の族類なり。既に部落を率い中華を慕いて来り、終に寵榮を保つ。前鑒と為すに足る」とのべ、呼韓邪を手本に和親に励めと論している。

玄宗は闕特勤碑文の中で、自らを宣帝に毗伽を呼韓邪に比しているわけであるが、戦うことなく和平をもたらしした宣帝と中華の蕃蔽となった呼韓邪を比較の対象に選んだことは、玄宗の目指した対突厥政策をさぐる上で重要な手がかりを与えてくれると思われる。

(b) 四行目…逮朕躬結為父子

玄宗と毗伽が父子の間柄になったことは『旧唐書』突厥伝に、

開元九年、(毗伽)使いを遣わして和を請い、玄宗と子と為らんことを乞う。上、これを許す。

と見える。中国皇帝が北方の遊牧政権と名目的な家族関係を結んだ例は、古くは漢の高祖劉邦が匈奴の冒頓単于と兄弟の盟約を交わして講和した事例にも見られるが、突厥第一可汗国の場合は、北周、北斉、隋、唐の各王朝と、その時々々の力関係に基づいて、おのおの舅婿関係、君臣関係を結んできた。^⑦だが、父子関係という形態はまだ見られない。

唐に対し、はじめて「子となりたい」と請うたのは毗伽の先代默啜で、聖暦元年、則天武后に対して請願している。しかし默啜は反服常なく、ほどなく唐に入寇、敵国関係に転じている。毗伽は默啜の先例に倣って「子と為らん」と乞うたわけであるが、玄宗と毗伽の間に成立した父子関係は壊れることはなかった。玄宗は碑文の中で父子関係を再確認し「父として我が子闕特勤のために碑を立てる」とのべているし、勅書の中で毗伽に「兒可汗」と呼びかけてもいる。^⑧毗伽も表の中で玄宗を「阿爺」と呼び親しみ、自ら「兒」と称している。^⑨この父子関係は毗伽の死までつづき、彼の死後は息子の伊然イナや登利テンリに引き継がれて、玄宗と伊然、玄宗と登利は、それぞれ父子関係を結んでいる。

このように血縁的な名分関係を結ぶことで夷狄を懐柔する方法は、突厥が滅びた後も中華側の典型的な外交政策として定着していく。事実、唐は安史の乱の折に助勢してもらった関係を機に廻紇と兄弟関係を結ぶようになったし、五代の諸帝は契丹(遼)から援軍を借りるために、兄弟、父子といった名分関係を結んでいる。^⑩北宋が遼と兄弟関係を結んだことも有名である。玄宗と毗伽の父子関係は、その後の中華と北方遊牧民族を含む周辺国家との間に頻繁に見られるようになった、父子、兄弟といった血縁的呼称に基づく外交関係の一様式に先鞭をつけたといえるだろう。

二 闕特勤碑文に見られる唐の外交姿勢

本章では、闕特勤碑文建碑の際に見られる唐側の外交姿勢について

考察を加える。まず最初に、玄宗にとって自ら撰文書写して碑を立てるといふことがどういう意味を持ったのか見てみよう。

太宗が王羲之の書を愛して自らも晋祠銘、温泉銘を書いたことは有名であるが、高宗、則天武后、中宗、睿宗も、みな書をよくし、自ら筆をとって碑を書いている。書を尊び愛好する気風の中で育ったためか玄宗も書を好み、自ら書写した碑をのこしているが、陝西省の西安碑林にある「石台孝経」と山東省泰山の磨崖碑「紀泰山銘」は特に著名で、現在でも書道の手本として親しまれている。『寶刻叢編』に見える玄宗の碑刻は三十三種を数えるともいわれ、父祖をはるかに凌いで唐の諸帝の中でも最多を記録している。『旧唐書』卷八の玄宗紀にも「性は英断にして多芸、尤も音律を知り、八分書を善くす」と見える。八分というのは隸書体の一種で、石台孝経、紀泰山銘、關特勤碑文も八分で書写されている。玄宗は行書の碑ものこしているが、隸書体の方が作品数も多く八分を好んで書いた。關特勤碑文の立石以前に玄宗が書写した碑も多く(表一)、或いはおのれの偉業を広く世に知らしめるため、或いは姉妹や功臣の死を哀惜して、盛んに立碑している。また、自ら筆をとることがなくても功臣のために詔して碑を立てさせることがあったし、碑額だけ書いて賜ることもあった。

玄宗が芸術文化を愛好し、詩文や歌舞音曲に傾倒したことを述べた逸話が多い。自ら作曲を手がけ、梨園で楽士を指導矯正し、孝経や道徳経にも自ら注をほどこした。多趣味な上に何でも自分でやらぬと気がすまぬ性分らしい。してみると、自ら撰文書写して碑を立てるといふ行為は、自己顕示欲の強い玄宗にとって、おのれの存在を誇示するための一手段であったといえよう。玄宗が突厥に御製御書碑文を贈っ

表1 關特勤碑文立石(開元20年)以前に立てられた玄宗の主な碑文

建碑年	碑文名	撰文者・書写者	書体	場所	出典
開元7	王仁皎碑文	張説撰・玄宗書	隸書	陝西省大荔縣	『金』72、『旧』183
開元8	盧懷慎碑文	蘇頌撰・玄宗書	八分	洛陽	『宝』4、『集』6、『旧』98
開元12	涼国長公主碑文	蘇頌撰・玄宗書	隸書	陝西省蒲城縣橋陵	『金』75、『陝』11
	華山銘	御製御書	八分	陝西省華陰西嶽廟	『金』75、『宝』10、『陝』11、『旧』8
開元13	鄜国長公主碑文	張説撰・玄宗書	八分	陝西省蒲城縣橋陵	『金』75、『陝』11
開元14	紀泰山銘	御製御書	八分	山東省泰山	『金』76、『旧』23
開元17	慶唐觀紀聖銘	御製御書	八分	山西省浮山縣龍角山の慶唐觀	『八』53
	王君奭碑文	張説撰・玄宗書	分書 (八分か?)	陝西省萬年縣	『宝』8、『旧』103

※略号：『宝』=『寶刻叢編』、『金』=『金石萃編』、『八』=『八瓊室金石補正』、『集』=『集古録目』、『陝』=『陝西金石志』、『旧』=『旧唐書』

唐玄宗「御製御書」關特勤碑文考

た理由の一つは、多分に彼の個人的な嗜好に起因すると思われる。

このように碑文愛好家の玄宗ではあるが、それでも自ら書いた碑を外交に用いた例は他になく、突厥に対して彼が相当に入れ込んでいたことが察せられる。

唐が突厥との交渉を重要視していたことは、実際に現地派遣された唐側の二人の使者である、張去逸と呂向の、唐王朝における地位、玄宗との繋がりから窺える。

まずは、建碑も含めた外交上の統括責任者として任ぜられた張去逸であるが、『旧唐書』卷五二の張皇后伝によると、去逸の母竇氏が玄宗の母昭成皇后の妹であることがわかる。つまり張去逸は玄宗の母方のいとこにあたる。昭成皇后は玄宗が幼い頃、則天武后に誅殺されるが、この時よるべを失った玄宗の養育に当たったのが竇氏で、これを徳とした玄宗は竇氏の息子達を引き立て、去逸は、太子舍人、金吾將軍、太僕卿、銀青光祿大夫等の高官を歴任する。

また、張去逸の墓誌銘^④の序の十行目には「詔して匈奴に使いする者を択ぶに、公を以て専対の選と為し、この行に膺らしむ」と見え、去逸が「匈奴」すなわち突厥に派遣されたことが銘記されている。つづいて「終に克く皇威を輝揚し、允に朝寄に副う。旋りて賞命を蒙る。時論これを榮とす」とある。なお、墓誌の銘文には「龍城の勒石、なんぞ燕然に慙しん」と詠われている。龍城は匈奴単于の本拠で、単于が天を祀った所であるが、ここは突厥可汗の本拠を指すのであるから、龍城の勒石とは玄宗の關特勤碑文のことである。燕然山は燕然山銘を指す。これは、燕然山で北匈奴の軍勢を撃破した後漢の車騎將軍竇憲が、漢の威徳を紀すために班固に命じてつくらせた碑銘で『文選』に全文

が記載されている。關特勤碑文は、かつて燕然山に立てられたという後漢の戦勝記念碑にも恥じぬ立派な碑文だと讃えられているのである。

次に呂向であるが、『新唐書』卷二〇二・呂向伝によると、呂向は草隸の書に工みで古今の典籍に通じ、開元十年、召されて翰林院に入り、集賢院校理を兼ね、太子諸王の侍讀も務めたとある。呂延濟、劉良、張銑、李周翰とともに『文選』に注もほどこしており（いわゆる五臣注）、呂向が当代有数の文人官僚であったことがわかる。

ここで注目される記事は、「帝、自ら文を為り、石を西嶽に勒す。向に詔して鐫勒使と為す」である。西嶽は五嶽の一つ華山であり『旧唐書』の玄宗紀にも「開元十二年冬十一月庚申、東都に幸す。華陰に至りて、上、岳廟の文を制す。これを石に勒し、祠の南の道周に立てる」と見える。これが「華山銘」である。鐫勒という名称から推察すると、呂向は刻石と立碑の監督者に任じられたのだろう。

呂向の名は「慶唐觀紀聖銘」の碑陰にも見え、「臣呂向、勅を奉じ、陰ならびに建碑年月日を題す」とある。この時の呂向の官職名は「建造摸勒龍角山紀聖碑使」で、摸勒（玄宗の文字を真似て碑石に彫ったのであろう）した龍角山慶唐觀紀聖碑の建碑を命じられた。

つまり、呂向は突厥に派遣される以前に、すでに玄宗の御製御書碑文の勒石建碑に二度も携わっていたわけである。呂向は草書と隸書にたくみで、連綿書という独特の書体も創始している。自らも「述聖頌」という碑をのこしており、書と碑刻に対する造詣はかなり深かった。名文家の張説や蘇頌が玄宗の碑の撰文を任されていたように、能書家だった呂向は玄宗の碑の刻石を専門に委ねられていたのだろう。

呂向伝によると、呂向は遊興に耽溺する玄宗を風刺する詩文を詠ん

窓で注目され、左拾遺、左補闕に拔擢されたとある。また、開元十三年、玄宗が、封禅に扈從していた突厥の大吏阿史德頡利発を衛兵隊に加えたいと言いついたおき、玄宗を強諫し、これを止めさせている。^② 詩文と書法にすぐれていたのみならず、気骨のある人物だったようだ。

剛毅な気性と「華山銘」「慶唐觀紀聖銘」を見事に完成させた実績を見込まれて玄宗に突厥行きを命じられ、現地で關特勤碑文の建碑を監督指導したのであろう。

以上のように、唐では皇帝自らが筆をふるって碑を書き、現地に派遣された使者も、実務レベルでの統括責任者は皇帝のいとこで大臣級の要人、建碑の監督者は博識な文人で碑刻のプロフェッショナルであるという事実からも、突厥との外交交渉に対して、唐が国家を挙げて力を注いでいることがわかるのである。

三 唐と突厥の外交関係の推移とその背景

——西域をめぐる唐・吐蕃の抗争——

本章では碑文がつけられた当時の東アジア、中央アジアの情勢を考察したいと思うが、ここでは従来あまり関連性が強調されることなかった、唐、突厥、吐蕃の三国の関係を中心にすえ、年代をおいて三国の動向と外交関係の推移を見ることにする。

東突厥が唐に滅ぼされたのは貞觀四（六三〇）年のことである。国滅びて後の突厥人は、単于都護府と安北都護府に属して唐の体制の中に組み込まれた者もいたし、將軍や傭兵として唐に仕え唐の遠征軍に従って朝鮮半島や西域で戦った者もいたし、唐の西域経営に携わった

者もいた。突厥人それぞれが唐の統治下で生きる道を模索していたのである。

ところが、滅亡してから半世紀程もたった六七九年を境に、単于都護府の管轄下にいた突厥人が組織だった叛乱を繰り返し起こすようになった。^③ 何故、半世紀程も経てはじめて突厥遺民が叛乱を起こしたのだろうか。叛乱の背景をさぐるため、西域に目を転じてみることにする。

西域は東西交易の要であり、莫大な富がもたらされるため、経済的見地からも非常に重要性が高く、唐は王朝史上初の都護府である安西都護府を西州高昌城に置く（六四〇）などして積極的に西域支配に乗り出していた。六四八年には都護府を龜茲に前進させ、その後六五一年から数年間、阿史那賀魯（西突厥復興運動）のため都護府は一時西州に戻されたものの、六五八年には叛乱を鎮圧し、タリム盆地全域を制圧した。それと前後して再び都護府を龜茲に前進させ、安西四鎮（龜茲・于闐・疏勒・碎葉）も都護府の管轄下に置くことで支配体制の強化にも力を注いでいる。

ところが七世紀後半に入ると吐蕃の勢力がこの地域にまで急速に浸透し、六七〇年には龜茲を陥落させて安西都護府を奪ってしまった。このため唐は安西四鎮を廃止せざるをえず、オアシス諸都市を含む西域は、一時、吐蕃の支配下に入ることになった。^④

吐蕃による安西都護府の陥落という事実は、経済上の打撃に加えて、唐の威信を甚だしく傷つけ、その支配力にも限りがあることを露呈してしまった。また、唐の注意が西方に向いたために北の守りが手薄になったことも充分に考えられる。これらのことが突厥遺民の独立

唐玄宗「御製御書」闕特勤碑文考

の気運を高める原動力になったのであろう。六七九年、そして六八〇年の二度にわたって突厥遺民による叛乱が勃発している。この叛乱は二度とも唐に鎮圧されてしまったが、六八二年に決起した阿史那骨咄祿は唐の攻撃をはねかえし、翌年には単于都護府を襲って指揮官を殺害、さらに六八六年から六八七年にかけて鉄勒諸部を打ち破ってモンゴル高原に本拠を移し、故国の再興を成就した。

突厥を復興した骨咄祿の生涯は唐に対する独立戦争に明け暮れ、毎年のように入寇した。そのため彼の時代、唐に対する朝貢もなされていない。骨咄祿の後を継いだ弟の默啜も、一時は唐に朝貢し、和を請うて冊立されたこともあったが、唐との直接対決という基本戦略は継続されて、再三入寇しては唐を悩ませた。

だが、開元四（七一六）年に即位した毗伽は父や叔父とは異なり、治世の間、一度しか入寇していない。しかもその一度きりの入寇も、開元八（七二〇）年に唐が、契丹、奚、拔悉密と共謀して東西から突厥を挟撃しようとしたのに対して、毗伽がやむなく甘州と涼州を襲撃したにすぎず、侵攻のための攻撃というよりも防衛のための反撃とあってよかった。再びこのような事態になることを恐れた毗伽は、翌九年、玄宗に向かって「子」となりたい旨、公主を賜りたい旨を申し出（子になることは認められたが公主の降嫁は許されなかった）、以後は連年欠かさず朝貢を繰り返すようになる。

骨咄祿と默啜の時代の突厥は、独立して間もないという时期的な理由もあって唐とは戦わざるを得ない状況にあったわけであるが、三代目の毗伽の時代になると、以下の二つの理由で安定した政権の確立が課題になってきたと考えられる。^④

表2 唐・突厥・吐蕃の外交と抗争

年代	突 厥	吐蕃（西域攻勢を中心に）
630	東突厥が唐に滅ぼされる	
640	唐、西州に安西都護府を創設（唐王朝初の都護府）	
658頃	唐、安西都護府を龜茲に前進させ、安西四鎮（龜茲・于闐・疏勒・碎葉）も設置して西域経営を強化	
670		吐蕃が安西都護府を奪い、安西四鎮を廃止に追い込む
679・680	唐に対する叛乱が二度勃発、二度とも鎮圧される	吐蕃による西域支配（670～692）
682	阿史那骨咄祿が叛旗を翻し、突厥を再興	
692		唐が吐蕃に大攻勢をかけ、疏勒以外のオアシス諸都市を奪回する
710	唐が、吐蕃と突厥の中間地点の涼州に河西節度使を創設	唐、金城公主を吐蕃に降嫁させる
716	毗伽可汗即位（～734）	
721	毗伽、唐に和親を申し出、玄宗の「子」となる	
727	毗伽、吐蕃の密書を唐に献上	吐蕃が瓜州を襲撃
728		唐、疏勒を吐蕃の手から奪回
731	闕特勤、死去	
732	玄宗の「御製御書」になる闕特勤碑文が建てられる	
734	毗伽に公主の降嫁が許可される。毗伽、毒殺される	

窓 突厥は部族連合という政体をとっているため、概して政権は不安定になりがちであった。事実、闕特勤碑文の突厥銘文にも、毗伽兄弟が諸族との間で毎年のように戦闘を行ったことが記されており、毗伽が主導権を確保することに難渋していたことがわかる。唐を手こずらせた黙啜も拔曳固の奇襲を受けて呆気なく殺害されてしまったし、毗伽自身も即位するとき弟の武力クーデターで政権を奪取し、反対派の肅清を断行している。強力なリーダーがいなくなると、すぐに崩れてしまふ脆さを突厥は内包していたのである。

いま一つの懸念は対外問題であった。六九二年、唐は大攻勢をかけて吐蕃の手中にあったオアシス諸都市の解放に着手しているし、七一〇年には吐蕃に金城公主を降嫁させて、長らく敵対関係にあった吐蕃とも和親している。和戦を巧みに使い分けて西域問題を処理した唐が、突厥に対して本格的に攻勢をかけてくることも考えられると、毗伽は危惧したのであろう。

国内問題と外交問題。二つの難題を解決するために、毗伽は唐と和親することを考えたと思われる。それでも、開元十三(七二五)年にはまだ「四夷の中で突厥が大なり」と称されて唐側からは問題視されている^⑧。開元十二年に毗伽が再度懇願した公主の降嫁も認められていない。毗伽は開元九年に玄宗と父子関係を結んだものの、開元十三年の時点ではまだ真意のはかりがたい存在として唐に警戒されていたようである。その後も毗伽の朝貢は続くが、唐と突厥との外交上、決定的な出来事が開元十五(七二七)年に起こった。『旧唐書』突厥伝には以下のように見える。

開元十五年、小殺(＝毗伽)、その大臣梅録啜をして来朝せしめ、

名馬三十四を献ず。時に吐蕃、小殺に書を与え、まさに議して時を同じくして入寇せんことを計る。小殺、并せてその書を献ず。上、その誠を嘉し、梅録啜を引ききて紫宸殿において宴し、厚く賞賚を加える。よって朔方軍の西受降城を互市の所と為すことを許す。毎年、縑帛数十万匹を齎し、辺に就きてこれを遣わす。

当時の吐蕃は金城公主を娶り、唐とは舅甥の間柄になっていたのであるが、通婚による和親政策は裏目に出ている。吐蕃は公主の化粧料である河西九曲を足掛かりに西域を狙い、侵攻をさらに激化していたのである。そのうえ敵国の礼をとって国書の言辞はすこぶる傲慢で、これに激怒した玄宗は吐蕃への親征を考えたことすらあった。そして開元十五年の九月、吐蕃は瓜州に矛先を向けたのであるが、瓜州攻撃にあたって毗伽に密書を送り、ともに瓜州を攻めようと誘いを持ちかけたのである。だが毗伽は応じず、吐蕃は単独で瓜州攻略に挑むことになった。それでも吐蕃の攻撃は凄まじく、瓜州の刺史らを捕らえ、城中の軍資や兵糧も掠め、瓜州城も破壊してのける。

このような経緯があったために、吐蕃の密書を献上した毗伽の従順な態度は玄宗をいたく悦ばせた。褒美として毗伽に互市も許可している。十六年に入ってから引き続き唐と吐蕃の間で激しい攻防戦が続けられたが、毗伽が吐蕃に呼応することはなかった。

西域の支配権をめぐる激しい戦闘を繰り広げる唐と吐蕃にとって、新たに登場した第三勢力突厥の動向は気がかりだったにちがいない。例えば、開元六(七一八)年に来朝した吐蕃の使節は玄宗に対し「唐は、吐蕃が突厥の骨咄禄と親しむことを疑っておいでですが、唐と吐蕃は昔から親善の使者を交換しあい、互いに舅甥と呼びあってき

唐玄宗「御製御書」闕特勤碑文考

ました。唐と吐蕃の関係が初めの通りであれば、吐蕃が突厥と通じることはないでしょう」と上書している^⑧。この言葉から、唐が突厥を第三勢力として意識していたこと、吐蕃が唐の態度次第で突厥と結ぶ可能性もありうると脅しをかけていることがわかる。突厥はこのように、唐と吐蕃の間で駆け引きの材料として引き合いに出されているのである。

毗伽が吐蕃からの密書を唐に献上するという思い切った手段に訴えた背景には、おそらく、唐と吐蕃の対立を最も効果的に利用して、自国を唐に高く売り込もうとする意図があったのであろう。唐の目が西方に釘付けになった隙に父が独立したように、西域経営に苦心している唐の弱点を見越して、唐との間に堅固な親善外交を築こうとしたのである。

一方の唐は、吐蕃と突厥が連合すれば両面作戦を取らねばならなくなる懸念を抱いていた。七一〇年、涼州に最初の節度使でもある河西節度使を創設したのも、東西交易路を守護するためであるが、吐蕃と突厥の中間地点である涼州に軍事拠点を築くことで両者の連繫を遮断する意味もあった。

こういった三国間の水面下での緊張関係が続く中、毗伽の方から和親を求め、玄宗の「子」となりたいと申し出てきた上に吐蕃の密書まで差し出してきた。最初は突厥を警戒していた唐も、毗伽の至誠を知るに及び、突厥とは和親政策でのぞんだ方が有利と判断したにちがいない。そして、突厥に親唐政権をつくって吐蕃を牽制し、唐は西方問題に専念しようと考えたのであろう。

玄宗は、開元九年二月に毗伽に与えた璽書の中で「唐が突厥の羊馬

を買い、突厥が唐の縑帛を受ければ、兩國はともに豊かさを享受できよう」とのべて、唐と突厥が共存し平和的に交易することの有益性を認識しはじめており、開元十五年の互市の許可で突厥への懐柔策を実行に移したわけである。また、唐との絹馬交易は、もはや入寇する必要がないほどに豊かな富を突厥にもたらしたと思われる。

西域の支配権を固持し東西交易路を平和に保ちたいと考える唐と、安定した政権の維持を望む突厥、双方の利害が一致して、兩國は結びあうことになったのである。

このようにして奇しくも北に親唐政権を打ち立てることに成功した玄宗にとって、突厥をサポートすることは、親唐政権の存続と北辺地域の安定化の両方の意味で重要になってくる。闕特勤は復興突厥随一の功労者・実力者であり、毗伽が最も信頼を寄せていた愛弟である。

特勤の葬儀に参列し、特勤を讃える碑文や祠廟の建立にも積極的に協力して哀悼の意を表明することは、毗伽の親唐感情を高め、かつ唐との強い結びつきを全面に出すことは他の部族への牽制となり、毗伽政権の強化、ひいては北方情勢の安定化に繋がる。

毗伽の忠誠心を確かなものにするために、玄宗自ら筆をふるって碑文をつくったのであろう。そして、ここで強まった唐と突厥の絆をよりいっそう強固なものにするために玄宗は公主の降嫁も試みる^⑨。だが、闕特勤碑文の建碑プロジェクトについて行われるはずだった公主の降嫁は、肝心の毗伽が毒殺されてしまったために実現を見ることはなかった。毗伽の後を継いだのは息子の伊然であったが、これは短命に終わり、伊然の幼弟登利がついで可汗位に就く。玄宗は毗伽の時と同じように登利と父子関係を結んだうえに、さらに冊立もして、いっ

窓
 そうの支援を重ねたが、幼い登利は王族同士の間起こった内訌のさなか殺害される。その後も可汗の廃立が続き、国内が末期的な混乱状態に陥る中、諸部族は相次いで背反してゆき、天寶三載（七四四）の廻紇の自立とあい前後して、突厥はついに滅亡してしまふ。

むすび

およそ人は自分の名を歴史に刻もうとする。まして、国を築き、覇を唱えた王ともなれば、おのれの生きざまを記したいと望むのは当然であろう。しかし、元来、記録をのこす習慣を持たない遊牧民族においては、伝承という不確かな方法で子孫に伝えるか、中国側の記録に頼ることしか、自分達が生きたあかしを叙述する手段はなかった。その意味で碑文を書くという行為は彼ら遊牧民にとって特別の意義を持っていたのであろう。

毗伽可汗は、唐との結びつきによって安定した政権が確立し、子孫何代にもわたって突厥が続くことを願ったのであろうが、その構想は数十年でついでる。だが、毗伽が唐との繋がりの中で建碑するに至った闕特勤碑文は、完成度の高い歴史記述としてユーラシアの大地にのこされた。⑨ 毗伽の王国は国家としては長くはのこらなかったが、彼の名と彼の民族の歴史は、碑文に刻まれた彼の民族の文字を通して、突厥民族のモニュメントとして後世に伝わることになったのである。

註

- ① 白鳥庫吉「突厥闕特勤碑銘考」（『白鳥庫吉全集』第五卷、岩波書店、一九七〇年）、小野川秀美「突厥碑文訳註」（『満蒙史論叢』四、一九四三年、三二八頁）『和林金石録』と京都大学文学部東洋史研究室蔵の拓本に

依拠した漢文面の転写が載っている）、竹中愛語「唐玄宗「御製御書」碑文の刻字」（『史窓』四七号、一九九〇年）など。

② 『史記』卷一一〇・匈奴伝に「匈奴、その先祖は夏后氏の苗裔なり」とある。白鳥前掲論文三三頁。

③ 「爾無我虞我無爾詐」。この表現は『春秋左氏伝』宣公の十五年に「宋、楚が平ぐに及び、華元、質と為る。盟に曰く、我は爾を詐るなかれ、爾は我を虞れるなかれ」と見える。いわば、宋と楚の間に取り交わされた和平の盟約である。「我無爾詐」と「爾無我虞」が逆になってはいるが、玄宗はこの盟を利用して和平の誓いとしたのかも知れない。

④ 白鳥前掲論文三四頁。

⑤ この状態は、漢王朝が王莽に篡奪されるまで六十年ほどつづく。

⑥ 呼韓邪の孫日逐王比は单于位を巡る内紛に巻き込まれた時、祖父の称号を襲名して呼韓邪单于を名のり、後漢の光武帝に向かって「漢の蕃蔽となつて北虜を扞禦したい」と言上し、助力を乞うた。一方、これを受けた光武帝も宣帝の故事に倣って比の願いを聞き入れ、比を支援して南单于に立てた（『後漢書』卷一九・耿国伝、卷八九・南匈奴伝、『資治通鑑』卷四四・漢紀三六・建武二十四年の条による）。

⑦ 『冊府元龜』卷九八〇・外臣部通好。

⑧ 護雅夫「突厥と隋唐兩王朝」（『古代トルコ民族史研究Ⅰ』山川出版社、一九六七年）。

⑨ 『曲江集』卷六「勅突厥苾伽可汗書」。

⑩ 『冊府元龜』卷九七九・外臣部和親に、開元三十二年四月、突厥、使いを遣わして来朝せしめ、婚を謝する。表して曰く（中略）皇帝は即ちこれ阿助なり、卑下はこれ兒なり。

とある。三十二は二十二の、阿助は阿爺の誤り。護前掲論文二〇二頁。

⑪ 李克用は契丹の耶律阿保機と兄弟関係を結んで援軍を請うた。又、遼の太宗は石敬瑭と父子関係を結んで建国に加勢、敬瑭を晋皇帝に冊立した。

⑫ 『中国書道全集』第三卷 隋・唐一（平凡社、一九八六年）、『書道金石学』書学大系・研究篇五（同朋舎、一九八九年）、『ヴィジュアル書芸術全集』第六卷隋唐（雄山閣、一九九三年）など。

⑬ 『唐 玄宗 石台孝経 上・中・下』（二玄社、一九七三年）、『中国

唐玄宗「御製御書」關特勤碑文考

- 『書道全集』第四卷 唐Ⅱ・五代(平凡社、一九八七年)など。
- ⑭ 『唐 玄宗 石台孝経 上』一二五頁。なお、同書によれば玄宗に次いで多く碑文をのこしているのは高宗で、その数は八種という。
- ⑮ この三つの碑文の刻字を比較検討したのが竹中の前掲論文。
- ⑯ 玄宗が行書で書いた碑に、金仙長公主碑文、裴光庭碑文などがある。
- ⑰ 『唐 玄宗 石台孝経 上』によれば『寶刻叢編』に見える玄宗の碑文三十三種のうち、十五種が八分書、七種が行書、他は書体不明という。
- ⑱ 郭知運碑文、張守珪碑文など。
- ⑲ 嵩岳少林寺碑文(太宗の御製御書)、贈丹州刺史先府君神道碑(張説が亡父のために建碑)、開元寺碑文などに自ら書いた碑額を賜っている。
- ⑳ 『隋唐五代墓誌匯編』陝西卷第一冊(天津古籍出版社、一九九一年)所収「故銀青光祿大夫太僕卿上柱國張府君墓誌銘并序」。
- ㉑ 『文選』卷五六「燕然山を封ずる銘」。
- ㉒ 『新唐書』卷六・肅宗紀。
- ㉓ 『金石萃編』卷七五の「華山銘殘字」によると、西嶽廟に立てられたこの碑は黃巢の乱の折に破壊されて、「駕如陽孕」の四文字のみがわずかに残っているということである。
- ㉔ 『山右石刻叢編』卷六「慶唐觀紀聖銘碑陰」。
- ㉕ 『金石萃編』卷七五「述聖頌」。呂向は、玄宗の華山銘を頌えるためにこの碑を西嶽廟に建てたという。『中國書道全集』第四卷には述聖頌の拓本が掲載されており、正書体で書写された呂向の書を見ることが出来る。
- ㉖ 『新唐書』呂向伝、『旧唐書』突厥伝。
- ㉗ 『旧唐書』突厥伝には、「永徽年間(六五〇～六五五)になってから、ほぼ三十年間、北方に異変はなかった。調露元年(六七九)になってはじめて単于都護府管内で突厥の首領阿史德温伝と奉職との二部がそろって叛乱を起し、泥孰匄を立てて可汗とした。二十四州がみなそれに呼応して背いた」とある(山田信夫訳注「突厥伝」『騎馬民族史2—正史北狄伝』平凡社、一九七二年、一一五頁参照)。唐側に突厥遺民を怒らせるような目立った失策はなかったようであるが、仮にあったとしても、二十四州にまで波及する程の叛乱が勃発する事態になった背景には、本文で述べたような要因があったものと思われる。
- ⑳ 嶋崎昌「遊牧国家の中央アジア支配と中国王朝」(『岩波講座世界歴史』六、岩波書店、一九七一年)、佐藤長「古代チベット史研究・上」(東洋史研究会、一九五八年)。
- ㉑ 林俊雄「掠奪・農耕・交易から観た遊牧国家の発展—突厥の場合—」(『東洋史研究』四四—一、一九八五年)。
- ㉒ 『旧唐書』突厥伝によると、毗伽も即位当初の熱意に燃えていたころ、唐への入寇を企てたことがあった。しかし、謀主の噉欲谷が「唐の皇帝は勇武の人で、唐は豊年でもあり、ついている隙がありません。いま動くべきではありません。それに我が国の民はまだ新しく集まったばかり。疲弊しており気力がありません。ここ数年は休息して力をつけ、唐に何か異変があったときはじめて行動を起こすべきです」といって諫めたので入寇を断念した(山田訳注の「突厥伝」一二九頁を参照)。
- ㉓ 『資治通鑑』卷二二・唐紀二八・開元十三年夏四月の条に見える、突厥対策を論じる張説と裴光庭の会話。
- ㉔ 『新唐書』卷二一六・吐蕃伝に「疑與突厥骨咄祿善者舊與通聘即日舅甥如初不與交矣」とある(佐藤長訳注「吐蕃伝」『騎馬民族史3』平凡社、一九七三年、二三四頁参照)。なお『冊府元龜』卷九八一・外臣部盟誓によると、この上書がなされたのは開元六年十一月のことであった。
- ㉕ 『資治通鑑』卷二二・唐紀二八・開元九年二月丙戌の条。『冊府元龜』卷九八〇・外臣部通好。
- ㉖ 『新唐書』卷二一五・突厥伝、『冊府元龜』卷九七九・外臣部和親。
- ㉗ 關特勤碑文の立碑以前にも、突厥ではブクト碑文(ソグド文字で記されている)やトニクク碑文といった碑文が書かれているが、完成度の高さ、規模の大きさ、建碑年代の確かさ、歴史的な意味あい等といった様々な点から見て、毗伽の書いた關特勤碑文が突厥碑文群の中で最も重要かつ代表的な碑であるといえる。

〔附記〕 本稿作成に際して、狩野直禎先生、並びに東京工業大学理学部の菅沼秀夫助教に御教示賜りました。末尾ながら深く感謝致します。